

第IV章 8月初旬から中国軍到着までの行動

A. 終戦間近の日本当局の指令

8月12日午前まで、我が参謀部もフエの私のオフィスも、戦闘停止の可能性について、いかなる情報も上層部から受け取らなかったと言え、みな当然驚くことだろう。しかし、それこそが紛れもない真実であったと、私は断言する。

私自身は、8月10日の22時、ラジオ・ニューデリーの放送を偶然聞いた。それは、「日本が伝えたばかりのラジオ放送によれば、天皇陛下の大権が維持されることを条件として、ポツダム会談で連合国が決定した各条件を受け入れる準備がある」という衝撃的な知らせであった。私は、激しく動揺しながらこの悲しいニュースを聞いたのだが、まだその信憑性を疑っていた。公式の確証が全くなかったため、私は秘密厳守を自分に課し、翌日の午前中になって、親しい協力者2人のみに話し、彼らには新たな指令がでるまでは絶対に慎重を期すようにと指示した。

しかしながら、8月11日正午ごろ、チャン・チョン・キム閣下が私を執務室に招き入れ、彼もまたこのニュースについて知っており、バオ・ダイ陛下はその信憑性を気にしておられると語った。ふたりともこのことについて、私の意見を知りたがっていた。私は、これら敵国のしばしば偏向した放送はまるで信用できないし、公式筋のいかなる情報もないので、正確なことは全く分からないと答えた。【p. 104】

私は新たな情報を得たらすぐに彼に知らせると約束し、官吏たちの間に広がるかもしれないこうした噂に、信憑性を与えないようにと頼んだ。

実際、その日の午後から、この噂はアンナン人、とりわけ官吏たちの間で町じゅうに広がり始めた。このことで、軍当局はとても動揺した。彼らはちょうど、ハノイの総参謀部 [l'Etat-Major Général de Hanoi] からの電報を受け取ったところだった。それは、東京の大本営 [le Grand Quartier Général de Tokio] からの公式情報を得るまでは、東亜における終戦について敵国のラジオから発せられる噂を、断固否定すべしというものだった。12日の午前、アンナン・ラオス旅団¹総司令官の服部将軍 [le Général Hattori, Commandant en Chef de la Brigade Annam-Laos] が、「日本は最後まで断固として戦い続ける」、「敵による情報は誤ったものであり、何よりも我が軍と同盟国の士気沮喪を狙ったものである」ということを、ベトナム政府と国民一般に納得させるために、必要な措置を至急講じるように、私に強く求めてきた。彼は、陸軍大臣による8月10日の談話を引き合いに出した。それは、「最終的な勝利を勝ち取るためにいかなる犠牲もいとわない我が政府の不屈の意志」を確認

¹ フエに司令部を置く独立混成第34旅団。

するものであった。

深刻で非常に断固とした調子でなされたこの要求を前にして、私は受け入れるしかなかった。[内心では] もはや不可避にみえる新たな状況に対して、世論を整然と準備するほうがよいと考えた。ベトナム政府の意向を予知して、必要な場合には、合議による指示を事前に共に検討するほうが賢明であった。しかし私は、またも個人的な意見を捨てて、軍当局の命令に従わなければならなかった。 [p. 105]

この方向に沿って、『越南新報』[“Viet-nam Tân-Bao”] 紙が編集されることになった。

フエの参謀部が、ハノイからの電信指令に従って、日本の天皇陛下の特別演説を伝えるラジオ東京の臨時放送を、正午ちょうどに全ての在留邦人に聞くように促したのは、ようやく8月15日朝のことだった。その放送は、ポツダムの休戦条件の受諾を告げ、日本の軍人および民間人に冷静を保ち、勅命に厳格に従うよう求めるものであった。

この悲痛なラジオ聴取の後、私の考えでは、情報は公式なものとなり、日本の降伏から生じる新たな国際政治状況を前に、世論が覚悟をしたということは、もはや明らかであった。この時もまた、インドシナの我が軍当局は、かなり特別で特殊な論拠による独自の考えを持っており、それは全体的な政治的観点から得た私の考えとはあまりに違っており、理解できなかった。軍当局はこの公式情報を拡散させることに反対した。休戦協定 [l’Armistice] はまだ調印されてはおらず、停戦命令はまだ上層部から届いておらず、[終戦に向けた] 協議が決裂するかもしれないことに鑑みて、「警戒」[le «qui vive»] を続けなければならず、我々の態度には何の変化もあってはならないと主張したのである。このことから私に言えることはただひとつ、広大なアンナン・ラオス地域の様々な戦略地点に駐留する部隊が、それに対する心構えのできていない突然で悲痛な状況に直面する前に、覚悟を決めることができるように、フエの参謀部が注意深く時間を稼いだということである。参謀部は、この深刻な状況において、日本軍の名高い規律が損なわれることなく、全部隊および全兵士 [p. 106] が例外なく、天皇陛下の停戦命令に従うことを望んでいた。ようやく8月20日になって、『越南新報』紙はポツダム宣言受諾に関する8月15日の玉音 [le Décret Impérial Japonais] 全文の掲載を許可された。

以上のことは、日本の現地当局が軍も民も、最後の瞬間まで、日本と連合国の間で行われていた協議について何も知らされなかったことを示している。私たちは、終戦が近づいても、この件に関していかなる指令も予告も受け取ることはなかった。私たちは、大半の在留邦人が少なくともギリギリまで予想していなかった既成事実、に、突如直面させられたのである。

さらに、これらの最後の出来事が慌ただしく起きて以来、敵国の放送による情報を否定せよという上述の命令と、フエとトゥーランの在留民間日本人をハノイやサイゴンに撤退させる件についての何本かの電信を除いて、私は上層部から政治的な性格を帯びた指令を、ひとつとして受け取らなかった。土橋將軍は、8月16日頃に私に1通の公式電報を送ってきた。

それには思いやりの感情が示され、また、この国で進行中の任務を適切に中断するために最善を尽くすようにと、私に要請するものであった。それ以降、いかなる上層部からも、政治的問題に関する指示が、私に与えられことはなかった。私の政治的任務は、チャン・チョン・キム政府の崩壊とベトミン臨時委員会 [le comité provisoire du Viet-Minh] による権力奪取によって、「事実上」[“de facto”] かつ「法律上」[“de jure”] 終わった。【p. 107】

B. ベトミン党²、そしてアンナンにおける急速な政権獲得

(1) ベトミンの反日活動と日本軍当局による弾圧

すでに、1944-45年の冬の期間にトンキンで猛威をふるった飢饉によって、ベトミンの扇動者が中国国境を越えて北部 [ベトナム] に浸透するのが容易となった。タイグエン [Thai-Nguyen] 省³における反乱が、彼らの活動の始まりとなった。3月9日以後、彼らの反日策動 [agissement antijaponais] は、ますます深刻な具体性を帯びてきた。連合国が重慶で、彼らの陰謀を奨励し助長していたことは疑いない。彼らは反日の第5列 [les cinquièmes colonnes anti-japonaises]⁴の養成を目指し、[インドシナ] 領域のいくつかの地点にベトミンの秘密工作員をパラシュートで降下させた。工作員はそこから秘密裡に村や町に浸透した。これら工作員のプロパガンダは、実に巧みに行われ、急速に勢いを増した。

タイグエンに置かれた拠点から、反日共産運動はすぐに拡大していった。行政システム全体の一時的な混乱を利用して、ベトミンは北部の全ての省において、農民大衆の共感を得るためにすばやく策動した。彼らは、省都の公的倉庫で発見した備蓄米を分配した。この活動だけで、ベトミン工作員は農民貧困層を引きつけることに成功した。歩兵や保安兵 [les Bao-Ans] の解散のあと、アンナン当局の警察部隊はまだ再編されていなかったのも、略奪が容易にかつ頻繁におきた。日本軍は、秩序と社会的平穩の回復を重要視していたので、

【p. 108】

この嘆かわしい事態をそのままにはしておけなかった。日本軍は、すぐにこのような略奪とベトミンの反日策動に対する鎮圧行動を開始した。

[しかし] これらの鎮圧措置はあまり有効ではなかった。ベトミンのグループは様々な集落で形成され、支持者の数は日に日に増えていった。憲兵隊 [La Gendarmerie] は、共産主義の政治的傾向の疑いがあるアンナン人の一斉逮捕を決定した。日本憲兵隊のこの警察作戦に関する情報は、6月末ごろには、フエのベトナム政府に知らされた。

チャン・チョン・キム首相 [Le Président Tran-trong-Kim] は、かなり大げさに伝えられていた情報を前に、すでに非常に懸念していたが、トンキン欽差のファン・ケー・トアイ閣下 [S. E. Phan-kê-Toai, Kam-Sai au Tonkin] から、折悪しくも憲兵隊の行動を嘆き、トンキ

² 原文は、Le Parti Viet-Minh.

³ Thái Nguyên 省はハノイの北に位置する。

⁴ 敵地に潜入して諜報活動や後方攪乱工作に従事する要員、グループ。第Ⅲ章注25。

ンにおける危機的な政治状況を伝える電信報告を受け取った。それゆえに彼は、時宜を逸し、かつ有効でないと判断するこの弾圧行動について、司令官の土橋将軍と個人的かつ直接に協議するため、すぐにハノイへ赴いた。彼はまた、これら全ての政治的困難の原因となっていると考えられる、棚上げされていた他の問題についても、解決策を探すことを望んでいた。

(2) ベトミンの圧力に対しチャン・チョン・キム政府が取った政策

チャン・チョン・キム閣下と彼の協力者たちは、ハノイとその周辺において、噂によると2,000人以上を逮捕したかもしれない憲兵隊の介入は、【p. 109】
現政府に敵対してすでに緊迫しているトンキンの政治状況を、さらにむやみに悪化させる恐れがあると考えていた。

逮捕者として挙げられた人物の中には、真の共産主義者でも反日主義者でもない名家出身の多くの若者たちが含まれていた。例えば、青年大臣の弟⁵や、むしろ親日派として知られた若い民族主義作家グエン・ザン氏 [Mr.Nguyen-Giang] などである。政府は次のように自問した。「真の事情を知らない日本の憲兵隊が、この状況をまさに利用したい一部の分子の巧みな術策にだまされているのではないか。扇動の真の首謀者はみな逃れ、憲兵隊により誤ってなされたこの警察的措置の犠牲になったのは、それまで中立であった政党の無実の党員たちである。この一事によって、誠意にみちたこれら全ての若者が、日本や現政府に敵対するようになるかもしれないし、みずから敵陣営に身を投じるかもしれない。このことは、王党派から民主社会主義者にいたるまでのナショナリスト全党派の統一と和解を図る政策、すなわち政府が熱意と英知をもって取り組み、すでに大きく前進させ、成功の望みを託していた政策を、頓挫させてしまうかもしれない。日本憲兵隊の無知で軽率な介入のせいで、その苦勞と希望が水泡に帰すのはあまりに残念だ」。

このきわめて深刻な事態の收拾を早急にはかるために、チャン・チョン・キム閣下は、ハノイの日本上層部と話しをすることを望んだ。首相は財務大臣、教育大臣、青年大臣、公衆衛生大臣⁶、そして私を連れて、【p. 110】
7月13日午前北部の首都に着いた。この日の11時から、首相 [le Président du Conseil] と土橋将軍のあいだで、非常になごやかな雰囲気の中かで会談が始まった。私は話合いに全て参加した。また、交渉の過程で必要に応じて、双方から他の関係者が呼ばれた。私たちは、7月30日の夕方までハノイに留まった。ベトミン鎮圧の問題に関してだけでなく、前章においてすでに述べたような他のいくつかの重要問題に関しても、会談は非常に骨の折

⁵ 青年大臣 Phan Anh の実弟は Phan Mỹ (1914-1987)。

⁶ 原文では *Ministre [s] ...de l'Hygiène publique* と記されているが、内容的に、第3章で言及された保健・救済大臣 [Ministredre la Santé Publique et du Secours National] のヴー・ゴック・アインを指す。ちなみに、財務大臣はヴー・ヴァン・ヒエン、教育大臣はホアン・スアン・ハン、青年大臣はファン・アインである。ファム・カク・ホエ (白石昌也訳)『ベトナムのラスト・エンペラー』平凡社、1995年、46頁をも参照。

れるものではあったが、そこから得られた結果に、首相は満足した。

(3) 日本当局とベトナム当局の間の合意

ベトミン問題について、以下に日本軍の関係当局によってなされた説明と約束の要約を述べる。

(a) 「日本の憲兵隊はさほど多くの人物を逮捕していない。フエで得た情報はとても誇張されていた。実際には、ハノイからハドンまでの間の地域で、約 120 人が捕えられた。数日後になってもまだ拘束されていたのは、30 人程度だけであり、彼らは現行犯で捕まった者たちであった。しかし、[この] 作戦は難しく、罪を問うべき真の首謀者は逃げてしまった。例えば、新聞売りの子供たち [bécons]⁷ が、新聞のひとつひとつに共産主義的なピラを挟み込んでいたのが見つかった。彼らはこの仕事に対して報酬を受け取っていたが、その内容を読むことも、何が問題とされているのか理解することもできず、わずかな報酬と引き換えにこれらのピラを渡した相手のことも全く知らなかった。いくつかの地下印刷所の存在が通報されたが、そこに駆け付けた時には、すでにもぬけの殻だった」。

(b) 「憲兵隊は、【p. 111】
逮捕した若者について、[ベトナム] 政府が釈放を要求している件については、早急に調査する。彼らの無実が証明されたら、すぐに釈放する。今後、憲兵隊は、秘密を厳守することを条件に、ベトナム当局に相談する。秘密を守らないのであれば、混乱の扇動者を鎮圧することは、ことごとく不可能となるう」。

憲兵隊によるこれらの説明と約束によって、ベトナム当局は安心した。そして、大臣たちは、まだはっきりとしない政治的展望を前にして、これまで用心して慎重な態度を保持してきた諸政党の指導者たちと、デリケートな交渉に乗り出した。共産党分子 [les éléments communistes] に対抗し、ベトナムの独立を強固なものとするために、団結が必要であると彼らを納得させるいくらかの希望はあった。しかしながら、一方で、これらの指導者たちは、政府の意思だけではどうにもならないような基本的問題について、多くの要求をした。例えば、コーチシナのベトナム復帰、総督府関連機関のベトナム政府への譲渡、仏領 3 都市問題の解決などなどの問題である。他方で、ベトミン運動が各地の農民貧困層やさらには若い知識人層にまで急速に広がっている間に、政府にはまだ警察 [la police] も公安 [la sûreté] も編成する時間的余裕がなく、他の緊急の軍事的必要性に忙殺されていた日本軍に頼ることもできなかった。チャン・チョン・キム政権の弱さは、以上の 2 点にあった。【p. 112】

⁷ ベトナム語を起源とする俗語的表現。ももとのベトナム語表記は Bé con, 幼い子供を意味する。